

『増鏡』の予言記事をめぐって

福田景道

かくて新帝は十七になり給へば、いとさかりにうつくしう、御心ばへもあてにけだかう、すみたるさまして、しめやかにおはします。

三月廿四日御即位、この行幸の時、花山院三位中将家定、御劍の役をつとめ給ふとて、さかさまに内侍に渡されけるを、今出川の大匠（公衡）、御覽しとがめて出仕とどめらるべきよし申されしかど、鷹司の大殿（前関白基忠）、「なかなか沙汰がましくてあしかりなん。ただ音なくてこそ」と申しとどめ給へりしこそ、なさけ深く侍りしか。後に思へば、げにあさましきことのしるしにや侍りけん¹⁾。

（第十一「さしぐし」(中四一〇頁)

正安三年（一三〇一）、後二条帝が踐祚して、持明院統から大覚寺統に十四年ぶりに皇位が移動した。『増鏡』にはその経緯が両統関係者の哀歓を交えて比較的詳しく伝えられる。右に引用したのは、その中の一部分、後二条新帝即位の箇所である。新帝が心身ともに王者にふさわしいことがやや常套的に賛美されるとともに、その即位にかかわる一点の瑕疵が印象付けられている。「あさましきことのしるし」とはわずか七

年後に訪れる後二条新帝早世の事実に対応する言辞であることは間違いない。鷹司基忠の温情にも視線が向けられているが、『増鏡』全編の皇位継承史的側面²⁾をも考慮に入れると、一廷臣の失態が名君による理想的治世の継続の期待を打ち砕いたというのがこの一節の主意であろう。

ここに「後に思へば」と前置きされるのは、元弘の乱終結後の某年某日、嵯峨の清涼寺で歴史語りが行われている時点で立っての感懐であることに基づく。『増鏡』の語り手が過去を回想的に語り伝える役割を担う限りは、その際にはすべての出来事はすでに確定した過去のものとして認識されていなければならない。元弘の乱以前の事象である後二条帝の夭折も既知の事実であるに違いない。そうであれば、この語り手が後二条帝即位の時点³⁾を語る際にその後の早世の事実を踏まえて「後に思へば」と述べるのはごく自然のあり方と受け取られるであろう。しかし、実際には、このような先取りの言辞は『増鏡』においては極めて例外的にしか見いだせないのである。

たとえば、後伏見帝元服の際に「今年十三にならせ給へば、御行末はるかなる程なり」（第十一「さしぐし」(中四〇三頁)）と言われる口吻からは、在位期間が長期に及ぶことが予測されるべきではないだろうか。

『増鏡』の予言記事をめぐって (福田)

ところが一年後には後伏見帝は讓位する。「いときびはにいたはしき御事なるべし。わづかに三年にておりさせ給へれば、何事のはえもなし」と慨嘆され(同四〇六頁)、先の「行末はるか」の予測はみごとに裏切られる。ここでも後二条帝の場合に行われたように、めでたさの中に暗雲の到来を暗示できたはずである。それにもかかわらず、あえて事実⁽³⁾に反する帰結を予想させる方向に昔語りは進められている。同様の例には、花園帝即位が「あるべきかぎりの事ども、古きにかはら⁽³⁾でめでたく過ぎゆく」と捉えられ(第十二「浦千鳥」(三三三頁)、光厳帝の朝廷が「よろづめでたく、ももしきの内、何事も変らず」(第十六「久米のさら山」(二四四頁))と賛美されることなどが挙げられる。いずれも安定した治世になることが印象付けられているが、少し後に花園帝の退位が記され、光厳朝は一年余り後に崩壊して予想は裏切られている。

このように、現実とは正反対の未来を予測させた上でそれに反する結末が描かれる場合は『増鏡』には少なくない。これらが、明暗の落差を強調するには非常に効果的に作用することには別稿で論及した。⁽⁴⁾理想的未来が約束された感のある後伏見帝の有様と、不本意な讓位に落胆する様子とを併置することで、明と暗は鮮烈に対照されるであろう。なお、これに語り手に常に現在のこととして歴史事象を語らせるという手法が加わると、暗転はさらに衝撃的に脚色され、明暗の対照は『増鏡』の基調になる点も看過できない。⁽⁵⁾

ところで、上に挙げた後二条帝即位や後伏見帝元服の記事では一種の「予言」がなされているとも考えられる。後二条帝は即位するにあたって「あさましきこと」に見舞われることが予告され、後伏見帝の「行末はるか」な将来が予祝されていると理解できる。明らかに予言として作

用している。ただし、それらは作品の叙述の範囲内で当否が判明する性質の予言であって、作者や仮構の語り手にとっては既定の過去を予想することに等しい。確実に的中できるはずである。ところが、『増鏡』の予言には、後二条帝の凶兆のようにそのとおり⁽⁶⁾に実現するものだけでなく、後伏見帝の場合のようにまったく正反対の帰結が待ち受けるものも少なからず存在するのである。

また、「先例」が予言の要因になる場合も考えられる。後二条帝即位時の不吉の根拠は、歴代の先例を踏襲しなかった一点に集約できるが、そうなるためには先例と相違する作法が先例と相違する運命(この場合不幸な運命)を招来するという思想の潜在が認められなければならない。このように先例を巧みに操作して明暗の対照を顕在化させる『増鏡』の特性は別に論じた。⁽⁶⁾後の悲運と対比するために、あえて佳例に擬装される仲恭帝の四歳踐祚の例についても別に指摘した。⁽⁷⁾これらの先例は一種の予言として機能しており、しかも予言されたことが実際と齟齬する例に加えられるであろう。

「予言」の概念をこのように広く捉えて、以下に全編の構成に及ぼす影響に注目する。

二

『増鏡』は「大体に於て宮中のやはらかな生活を写す」と言われ、⁽⁸⁾三大特色の一つに「宮廷貴族社会における儀式・行事などの記述が詳しい」⁽⁹⁾点が挙げられている。その中でも、壮麗な行事や儀式の場において将来の繁栄が歌句によって祈念され、予祝される場合が目立つ。これも広義

の予言と考えられる。そのうえ、盛事や盛儀の表現に魅了された読者であれば、それを主宰した人物の栄華や権勢は当然永続すると予想するであらう。そこで、未来が儀礼的に祝福される場面に注目して、特に詠歌の予言的機能に触れておきたい。

後鳥羽院の造営した水無瀬離宮で「御心ゆく限り世を響かして」盛んに遊宴が行われるさまの描写の中に、若き日の定家の歌二首が収載されている（第一「おどろのした」(四三頁)）。

あり経けんもとの千年にふりもせてわが君契る庭の若松

君が代にせき入るる庭を行く水の岩こす数は千世も見えけり

と、後鳥羽院の永遠の栄えを祝福するものである。水無瀬殿におけるこの時の詠歌は、これ以外には帝王ぶりの雄大さで知られる院の代表歌、

見渡せば山もとかすむ水無瀬川夕は秋となに思ひけん

の一首のみが見られる。離宮の風趣を誇示し、院の全盛を象徴する絶唱である。これと並んで定家の二首が特に紹介される背景に、この繁栄の永続を予祝する意図を読みとつても大過ないであらう。少なくとも、この歌句に託された期待や願いが結局は空しかったとは書かれていない。しかし希望的観測は大きく覆される。それどころか、ここでの贅嘆は、後に流涕の身になった後鳥羽院の悲哀と鋭い対照を示す。孤島の寓居の有様が描写された後に「水無瀬殿思し出づるも夢のやうになん」と嘆かれるほどである（第二「新島守」(五一二頁)）。先に水無瀬殿の壮観が強調されたのは、後の離島での惨状と対比するためだったように思われる。両者を比較することと配所の悲惨さはさらに絶大なものになる。このように考えると、すべてを熟知する語り手によって後鳥羽院権勢の永続を予祝する定家の詠歌が特記されたのは、後の没落を射程に入れた

『増鏡』の予言記事をめぐって (福田)

ゆえにはかならず、明暗の対比に大きく貢献していると理解できるのである。

他にも盛儀において繁栄の恒久性を予祝する和歌が詠まれる場面は多いが、その期待のほとんどは裏切られる。まず、後鳥羽帝と順徳帝の大嘗会の屏風歌にその典型がうかがえる。後鳥羽朝の長久を祈って主基国丹波国の長田村が、

神代よりけふのためとや八束穂に長田の稲のしなひそめけん

と詠み込まれ（第一「おどろのした」(三八頁)、順徳帝の前途を近江国長楽山に託して祝う悠紀方の

菅の根のながらの山の峰の松吹きくる風も万代の声

も記載される（同(六六頁)）。両帝が承久の乱に敗れて悲劇的な最期を遂げる部分とこの二首を対比すると、明暗の落差は一層顕著になる。

後深草帝の大嘗会の頃に少将内侍が詠んだ、

九重の内野の雪に跡つけてはるかに千世の道を見るかな

の一首に込められた繁栄への願いにも同様の効果が期待できる（第五「内野の雪」(二五四頁)）。後年同帝の不本意な讓位を嘆く弁内侍の

今はとておりる雲のしぐるれば心のうちぞかきくらしける

に対応して明暗の差を際立たせるからである（第六「おりる雲」(申五二頁)）。弁内侍は少将内侍の姉にあたる。

後二条帝が祖父龜山法皇の長寿を

君はよし千年のよはひたもてればあひみん事のかずもしられず

と予祝するのも空しい（第十一「さしぐし」(申四二頁)）。予祝された法皇は二年後死去し、予祝した天皇も六年後には世を去ることが後文に記される。

『増鏡』の予言記事をめぐって (福田)

また、後醍醐朝を彩る中殿和歌御会や北山への花見行幸などでの詠歌も同様の例に加えられる。和歌御会では後醍醐帝自身

時しらば花もときはの色にさけわが九重は万代の春

を初めとして尊良親王と世良親王の

のどかなる雲井の花の色にこそ万代ふべき春は見えけれ

もしきのみかきの桜咲きにけり万代ふべき千代のかざしに

が詠まれ(第十五「むら時雨」(下)一七七・一七八頁)、花見行幸では西園寺公宗と尊良親王の

時をえてみゆきかひある庭の面に花もさかりの色や久しき

代々をへてたえじとぞ思ふこのやどの花にみゆきのとをかさねてなどが記載されている(同下)一八六・一八七頁)。これらの未来の繁栄を寿祝する麗句は、結局は、後に続く倒幕運動の辛苦の活写との対照を強調するのである。

以上のように、大嘗会や行幸などの光輝を象徴する場で詠まれる予祝歌は多く、そのほとんどは後の運命の反転と対応して、明暗の落差を顕現させる方向に機能しているのである。

『増鏡』に公家の優雅な生活や盛儀が縷述され、多数の和歌が織り込まれるのは、王朝のみやびの伝統の存続を証明するためであったことは否定できないであろう。⁽¹¹⁾しかし、同時に詠歌による予祝には、後の暗転を前提とする一面も指摘できるように思われる。そうすると、後嵯峨院の鳥羽殿や住吉への御幸に伴う四首の頌歌(第五「内野の雪」(上)二六〇・二七一頁)、後深草・龜山両院の伏見殿御幸の時に詠まれた二首(第十「老の波」(中)二六四頁)に対応する未来も理想的なものとは位置付けられていないのかもしれない。また、東二条院(西園寺実氏女公子)と

永福門院(西園寺実兼女鐙子)の入内に関して予祝歌が収載される(第六「おりる雲」(中)二七頁、第十一「さしぐし」(中)三四〇頁)のは、両中宮が大きな期待を背にうけながら遂に男皇子をもうけられなかった点を重視するなら、不幸な結末と対応させて、明暗を対照するための祝福とも考えられる。入内記事に予祝歌が伴われるのはこの両度だけなのである。

『増鏡』世界には、さまざまな予言的表現がちりばめられ、運命の変転、禍福の落差が強調されていることは間違いない。一編の根底に流転思想が見いだされる所以である。⁽¹²⁾ただし、その強調に寄与する例としてここまで挙げたのは、ほとんどすべてが狭義の予言に属さず、間接的・感覚的であり、隱微に発現するものである。「予言」を広義に解釈してはじめて抽出できる特性であることを確認しておきたい。

三

『増鏡』には語り手以外の第三者が未来を予言する場合がある。『新古今集』撰集後まもなく承久の乱が勃発したことから、『新勅撰集』の集名に再び「新」が含まれるのを「心よからぬ事」と言って、奏覧された後堀河帝の凶事を隠然と予言するのは「ささめく人」である(第三「藤衣」(上)一八五頁)。続いて「例の人の口さがなさ」によって四条帝の生誕直後の立坊が、仲恭帝の先例に重ねられて不吉と判断されるが(同一八七頁)、これは四条帝の夭折を暗示する意に相違ない。四条帝の不幸は、諒闇が三年にわたるのを「いとまがまがしくゆゆし」と見る「みな人」によっても予告されている(同一九三・一九四頁)。また、「めでた

き御事」に演出された継仁親王の「歩きぞめ」に際して、当時施行された條約令によって物見車の下簾が短く切断されたことを、凶兆と道破したのも第三者である（第十「老の波」(中)二七三頁）。

一方、この第三者は、話題となる事件・事態を同時的にしか体験できないため予期に違う事態に遭遇しなければならず、予言能力の欠如をしばしば露呈する。

世の中は新院（後深草院）かくておはしませば、法皇（故後嵯峨院）の御かはりにひきうつしてさぞあらん、と世の人も思ひ聞えけるに、

（中略）かたがた（後深草院が執政するのが）ことわりなるべき世を、思ひの外にも思ふ人々も多かるべし。

（第八「あすか川」(中)一七四頁）

と、後深草院政への世間の期待がみことに裏切られるさまが活写される。中宮嬪子が西園寺家出身でありながら帝に寵愛されないのを「思はずなること」と風評するのは「世の人」である（第七「北野の雪」(中)七〇頁）。後二条帝の没後に外祖父堀川具守が喪に服さないのを「思はずなること」と断じるのも「世の人」である（第十二「浦千鳥」(下)二九頁）。後醍醐帝の失脚によって皇位は当然持明院統に固定すると信じた「世の人」の予想は大覚寺統の康仁親王の立場で覆される（第十五「むら時雨」(下)二四〇頁）。「世の人」が早くから「后がね」と信じた西園寺実衡女であったが、意外にも帝の寵愛はなかった（第十六「久米のさら山」(下)三三七・三三八頁）。

このように、『増鏡』には、未来を正確に予想したり、予想に反する現実に驚愕せざるを得ない世間一般の人心が随所に描かれている。彼ら

『増鏡』の予言記事をめぐって（福田）

は『増鏡』という舞台で歴史劇を演ずる実在の登場人物とは異質で、あえて言えば語り手に近いものである。明確な外貌をもつことで自由な発言が制限され勝ちな語り手の代弁者となり、語り手とともに多面的な歴史語りを形成するのである。そのことは「第三者」や「世の人」に敬語が一切用いられない点からも傍証できるところである。

『増鏡』の「世の人」には語り手の機能を補完する一面があるのは否定できない。この点では『大鏡』にも近似する¹³⁾。また、水無瀬殿で後鳥羽院の栄華の永続を予言する歌人定家などもこれに近い役割を担うように思われる。しかし、それに加えて、『増鏡』の世評の特徴として、世の中の変動にひたすら驚愕する場合が多い点にも留意されなければならない。比較的冷静に世の動きに対処する語り手に対して、世評は激しく動揺している。この点では歴史世界の当事者に近い面もある。あるいは、世間の一般的な感想を集約し、世間そのものを抽象的に表していると言つてよいかもしれない。

世間の人心はたしかに世の中の転変に翻弄されている。その投影として、鳴動する世間の有様が表出される場合も多い。『新古今集』撰集後の竟宴は「いみじき世のひびきなり」（第一「おどろのした」(上)五七頁）と賛嘆され、仲恭帝誕生の際には「世の中ゆすりみちたり」（同六七頁）と明言される。このほかにも貴顕の慶事の場面に付言される世間一般の歡喜の表出は多い。以下に列挙してみる。後堀河帝中宮の藻壁門院（九条道家女嬪子）の懐妊の際の「世の中めてたく聞ゆ」¹⁴⁾（第三「藤衣」(上)一八八頁）、後嵯峨帝の踐祚を見たときの「世の人の心地みな驚きあわてて」（第四「三神山」(上)二二三頁）、京極院信子の後宇多院出産に対する「世の中ひびきて」（第七「北野の雪」(中)一〇三頁）、北山准后の九十

『増鏡』の予言記事をめぐって (福田)

の賀における「天下かしがましく響きあひたり」(第十「老の波」(中二八九頁)、後醍醐帝中宮禧子の懐妊の報に接しての「いみじき世の騒ぎなり」(第十五「むら時雨」(一六八頁)、光厳帝即位の行幸の際の「世の中めでたくののしる」(第十六「久米のさら山」(二八六頁)、同帝大嘗会の準備への「天の下もの騒がしう」(同三四頁)、後醍醐帝帰京に際しての「世の中ひしめく」(第十七「月草の花」(三三三頁)などである。流布本にも、後嵯峨帝の中宮である大宮院姑子の懐妊に「世の中ゆすりさわぐ」(第五「内野の雪」(二八九頁)さまが記され、仁和寺の御室法助の灌頂における「世の中ののしるさま、いとけしからぬまで響きあひたり」(同三八頁)という一文が見いだせる。

一方、高貴の家々の不幸に同情し、動揺する世間も描かれる。これも列挙する。將軍実朝暗殺に対する「世の中火を消ちたるさまなり」(第二新島守(上)一一三頁)、後堀河帝死去に対する「世人の惜しみ聞ゆるさま限りなし」(第三「藤衣」(上)一九三頁)、後嵯峨院の不遇に対する「なべて世の人もいとあたらしきことに思ひ聞えけり」(第四「三神山」(上)二〇八頁)、四条帝死去の「みな人あきれまどひて」(同二二五・二二六頁)、蒙古来襲の「世の中騒ぎ立ちぬ」(第十「老の波」(中)二七七頁)、浅原某の皇居乱入事件の際の「世の中ゆすりさわぐさま、言の葉もなし」(第十一「さしぐし」(中)三六〇頁)、後二条帝の危篤に対する「世のひびきいはんかたなく」(第十二「浦千鳥」(下)二九頁)、後宇多院重態に対する「天下の騒ぎ思ひやるべし」(第十四「春の別れ」(下)一一九頁)、正中の変勃発時の「世の中いみじく騒ぎののしる」(同二三四頁)、洞院実泰の死去に対する「世の中いみじく嘆きあへり」(第十五「むら時雨」(下)一七〇頁)、世良親王死去に伴う北畠親房の剃髪における「世にもい

とあたらしく惜しみあへり」(同一七八頁)、後醍醐帝の重態への「世の中慌てたるさまなり」(同一九六頁)などの例が挙げられる。

他にも類例は指摘できるかもしれないが、以上で『増鏡』の「世の人」が貴人の禍福に激しく影響され、同調する様相が知られるであろう。権勢に迎合する姿さえ透視できる。なお、世間に期待された藻壁門院と中宮禧子の懐妊は実は不幸を誘発し、光厳帝の栄光は瞬時にして途絶している。反対に後嵯峨院の不遇は僥倖に転じ、蒙古来襲と後醍醐帝の重態は杞憂に終わっている。世の人の予言能力の欠如は明白である。

さて、『増鏡』には予祝歌や世評が感性的で隠微な予言として機能すること、極めて常識的内実にもかかわらず必ずしも正確ではないこと、そして特に事実⁽¹⁵⁾に反する予言が有効に作用して明と暗の対照を促進し、流転思想をも顕現させていることなどが窺知できたように思われる。永続の予言はほとんど裏切られ、未来を安定させるはずの予言がかえって未来の不確定性を助長するのである。また、世間の風評や人心は歴史語りを補足するよりも世の中の変動に翻弄され、むしろ変動を強調する場合が多いことも明暗の懸隔を際立たせるであろう。

また、ここまで挙げた予祝、世評などの用例のほとんどすべてが皇位継承にかかわるものであることも注目される。しかも、皇位に関する大変動を的確に予言する例はないのである。予祝歌の詠者も「世の人」も皇位継承過程に関心を持ちながら、その帰趨に従属し、翻弄されざるを得ないのかもしれない。天皇家や最高貴族を除く宮廷社会は小規模で微弱な予言を発しつつ、皇位継承史の明暗を脚色しているとも言えよう。次に検討すべきは皇位を左右する大きな予言である。

四

前節までに検討した広義の予言は、明暗対比や無常観の強調に寄与するところは大きいが、決して世の中の基盤を揺り動かすものではなかった。『増鏡』世界の主軸をなす皇位継承の過程を規制するには至らない。また、禍福の交替や世界の転変を明示する意図を指摘しても『増鏡』の中心の主題を闡明したことはなり得ないと思われる。『増鏡』が特定の時代を扱う歴史叙述であっても、特定の事件を扱う叙事文芸であつても、生々流転や諸行無常などの一般的歴史観・世界観を抽出しただけでは、その主題や本質を説明したとは言えないのではないだろうか。というのは、『増鏡』が後鳥羽院から後醍醐帝までを統一された一つの時代と認定する断代史の性格をもつ限りは、そこには独自の歴史世界が構築されているに違いないからである。⁽¹⁶⁾そこに描き出されるのは、歴史の普遍的実相ではなく、あくまでも特殊な一時代なのである。そこで、『増鏡』構想の機軸をなす皇位継承過程の追及にその解明の糸口を見いだしておきたい。

『増鏡』では意想外の皇位継承が二度にわたって夢告される。

その頃いと数まへられ給はぬふる宮おはしけり。守貞の親王（後高倉院）とぞ聞えける。（中略）草深く八重葎のみさしかためたる宮の中に、いと心細くながめおはするに、建保の頃、宮の中の女房の夢に、冠したる者あまた参りて、「劍璽を入れ奉るべきに、おのおの用意して侍らはれよ」といふと見てければ、いとあやしう覚え、宮に語り聞えけれど、「いかでかさほどの事あらん」と思しも

『増鏡』の予言記事をめぐって（福田）

よらで、遂に御髪をさへおろし給ひて、この世の御望みはたち果てぬる心地して物し給へるに、この乱れいで来て、一院（後鳥羽院）の御族はみなさまさまにさすらへ給ひぬれば、おのづから小さきなど残り給へるも世にさし放たれて、さりぬべき君もおはしまさぬにより、東よりのおきてにて、かの入道（守貞）の御子の、十になり給ふ（後堀河帝）を、承久三年七月九日にはかに御位につけ奉り、父の宮をば太上天皇になし奉りて法皇（後高倉院）と聞ゆ。いとめでたく横さまの御幸ひおはしける宮なり。

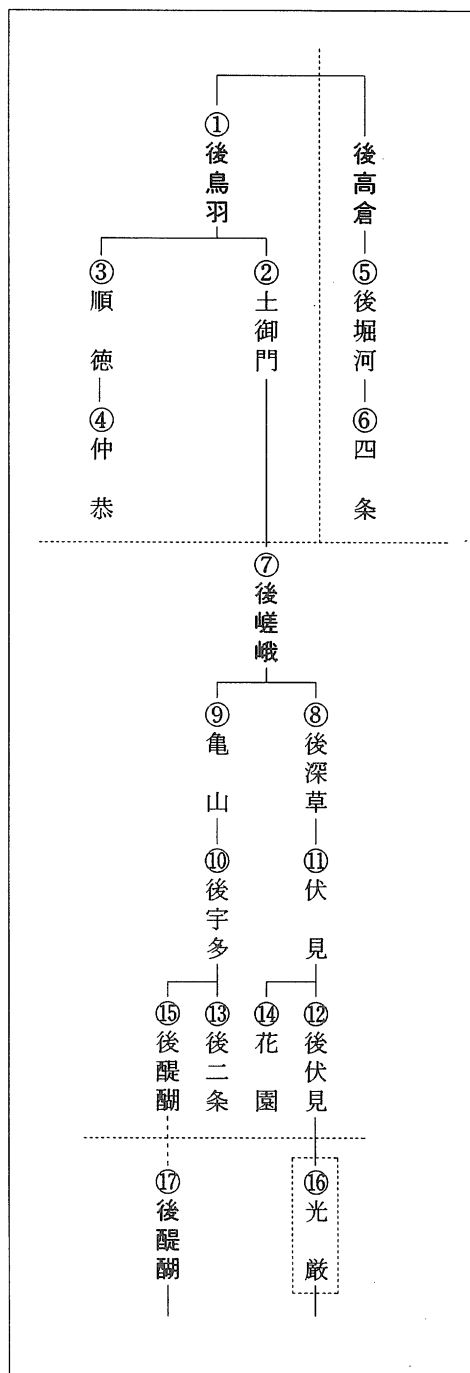
（第三「藤衣」(上)一六六・一六七頁)

逼塞を余儀なくされていた後高倉院のもとに、一女房の夢見のとおり玉座が巡ってきた経緯が物語られる。この夢こそが直接的で明確な予言、すなわち狭義の予言である。同じように皇位から隔って不如意な生活を送っていた後嵯峨院にも皇位継承の夢告がもたらされる。

土御門殿の宮（後嵯峨院）は二十にもあまり給ひぬれど、御かうぶり沙汰もなし。城興寺の宮僧正真性と聞ゆる、御弟子にとかたらし申し給ひければ、さやうに思して女院（祖母承明門院）にもほめかし申させ給ひけるを、いとあるまじき事とのみいさめ聞えさせ給ふ。その冬ころ、宮いたうしのびて、石清水の社にまうでさせ給ふ。御念誦のどかにし給ひて、少しまどろませ給へるに、神殿の中に「椿葉の影ふたたびあらたまる」といとあざやかにけたかき声にてうち誦じ給ふ、と聞きて御覧じあげたれば、明け方の空すみわたれるに、星の光もけさやかにて、いと神さびたり。いかにみえつる御夢ならんとあやしくおぼさるれど、人にもものたまはず。とまれかくもあれと、いよいよ御学問をぞせさせ給ふ。

治天君	天皇	『増鏡』巻名
後白河	安徳	おどろのした
後鳥羽	後鳥羽	
	土御門	
	順徳	
	仲恭	
後高倉	後堀河	藤衣
後堀河	四条	三神山
四条		
後嵯峨	後嵯峨	内野の雪
	後深草	おりある雲
	龜山	北野の雪
龜山	後宇多	あすか川
		草枕
		老の波
後深草	伏見	さしぐし
伏見	後伏見	
後宇多	後二条	浦千鳥
伏見	花園	
後伏見		
後宇多	後醍醐	秋のみ山
後醍醐	光厳	春の別れ
後伏見		村時雨
		久米のさら山
後醍醐		後醍醐

治天の君・天皇 変遷対照表



『増鏡』皇統図

(注) 太字は皇統の始祖的存在を示し、○内数字は踐祚の順序を表わす。

『増鏡』の予言記事をめぐって (福田)

第四「三神山」(上二一三頁)

この後、四条帝が急死し、順徳院の皇子を制して後嵯峨帝登極の夢が実現し、前掲の「世の人の心地みな驚きあわてて、おし返しこなたに参り集ふ」さまが引き起こされるのである(同二二一・二二三頁)。夢告への対処法の差異と現世的意欲の有無とによって両院の境遇は相違するが、ほぼ同じ趣旨と認められるであろう。¹⁷⁾

当時、夢告は冥慮を知る最も確実な方法であった。これらの皇位継承はまさに神の意志であることが強調されている。ここでは「東」(鎌倉幕府)よりもはるかに神意が重視されているのは明らかであろう。このほかにも「頼朝が後はその御太刀あづかるべし」と春日明神が予告した摂家將軍の誕生(第二「新島守」(上)一一八・一一九頁)や西園寺建立(第五「内野の雪」(上)二三三頁)などに神慮が夢を介して伝えられ、現実のものとなっている。世の中の最重要なこと、予期できないこと、大きな変化、新しいことの始発などは絶対者が決定し、告知するのである。そういう事例の数々が『増鏡』には克明に記されている。

その中でも後高倉・後嵯峨両院に皇位がもたらされる事情が最も精彩を放つ。『増鏡』の後嵯峨院は土御門院の憤懣の代償として皇位に就いたのではない。土御門院の側からはそうも言えるであろうが、後嵯峨院は神命と精神の強靱さによって新たな体制と秩序を樹立したと見るべきではないか。『増鏡』の後嵯峨院の存在感はそれほど大きい。むしろ、作品の中枢部を占める後嵯峨院の栄光によって土御門院の悲痛が救済されているのである。また、後高倉院政権は不遇時代の反動だけで招来されたものとは言えない。皇統の浮沈に視点を定めればそういう見方も成り立つが、冥界の意志が後鳥羽院を失脚させたこと(後述)を主因とす

『増鏡』の予言記事をめぐって (福田)

るのではないだろうか。

あるいは、後高倉院と後嵯峨院が政権獲得する過程の神秘性には、新王朝が創始されたという趣意がくみ取られるべきかもしれない。始祖伝承には多く霊感が伴う。さらに言えば、第三「藤衣」と第四「三神山」の巻初の丹精は新しい主人公の登場を宣言しているようにも思われる。この二度の皇位移動が精叙されるのに対して、後高倉院から後堀河院へ、さらに四条帝へと父子相承される過程、後嵯峨院から後深草院や龜山院などに皇統が伝えられていく経緯に夢告や神意はまったくかわらず、平板に叙述されるのも、彼らが始祖でないためとも考えられる。ほとんどの皇位継承に神託は関与していない。

一方、治世の終焉が超自然的な凶兆で予告される場合は頻繁に見いだせる。四条帝の踐祚にあたって「この三年ばかりは天変しきり、地震ふりなどして、さとし繁く」とあえて明記されるのは四条帝の短命の予兆としてであろう(第三「藤衣」(上)一八七頁)。これに前述の『新勅撰集』の「新」字、四条帝の誕生直後の立坊や二歳踐祚の際の不吉な先例の指摘¹⁸⁾などが作爲的に繰り返されて後高倉皇統は衰滅に導かれていく。この先例の操作に一皇統の絶滅を必然たらしめようとする意図が察知できる。「先例」とは、それが「先例」として認識された時点ではじめて「先例」となりうるのであって、アプリオリに存在するわけでは決していない¹⁹⁾と言われる。

また、後鳥羽院にも破滅する予兆はあった。『増鏡』においては、承久の乱の最大の敗因は、日吉社の怒りにあったことが神託で示されている(第二「新島守」(上)一三〇頁)が、これは神意が後鳥羽院の勝利になかった趣意にはかならない。踐祚の際に三種の神器を欠いた点(第一「お

どろのした」(三三頁)も、先例に反するだけでなく、冥助を失う原因となるのかもしれない。こうして、三上皇と帝を擁する後鳥羽皇統も壊滅する。

後伏見朝が「行末はるか」と予祝されながら短命に終わるのも、実は神慮に基づくと思なされている。

又の年(正安三年)睦月の頃、内侍所の御しめのおり給へるは、いかなるべき事にか、など忍びてささめく程こそあれ、東より御使のぼるとて、世の中騒ぎて、禅林寺殿(亀山院)見奉り給ふ世にとや、正月廿一日春宮(後二条帝)位につかせ給ひぬ。

(第十一「さしぐし」(四〇六頁))

と、はっきりと運命の暗転が予告されての讓位に定位される。これはさらに持明院統全体の衰退の前兆としても機能するように思われる。花園院も後伏見院の猶子になることで運命をとにもする(第十二「浦千鳥」(三三頁))。また、後伏見院に代わって皇位に就いた後二条帝も、冒頭に引用したように「あさましきことのしるし」によって悲運が約束されている。邦親王と康仁王が東宮になりながら踐祚できないのも後二条帝の凶運を継受したためと見るのは強引すぎるであろうか。後醍醐帝にも不吉な兆候は多い。「よき人々多く失せ給ふ」治世と位置付けられ(第十四「春の別れ」(一六二頁))、「しはぶきやみ」の流行はさらに相次ぐ要人の死を招く(第十五「むら時雨」(一七七頁))。即位の日には左右の大將による行列争いがあり(第十三「秋のみ山」(五〇頁))、大嘗会の際には参議有時が斬殺される異変があった(同)のも凶兆に違いない。明らかに後醍醐朝の衰運が予言されている。大覚寺統も後退せざるを得ないのである。²⁰

こうして、後伏見・花園・後二条・後醍醐の四流に分岐して磐石と思われた後嵯峨院皇統の末葉もそれぞれの原因で枯れ果てる。しかもすべて院や帝本人には責任がなく、神の気紛れとしか言いようのない原因が指摘される。その運命の不思議を脚色し、顕在化させるのが予祝や世評による予言記事なのである。

さて、そこで問題になるのは後醍醐帝の復権で幕を閉じる現存『増鏡』の構成である。未完結説の立場をとれば事情は異なるかもしれないが、現存本の幕切れは失墜したはずの後醍醐帝の再起の説明を要請するであろう。後醍醐帝の人物形象法からも一応の解決は可能だが、本稿の主旨に即してさらに検討する。

ここにおいて注目されるのが、後醍醐帝の京都帰還が夢告で約束される点である。

(後醍醐先帝は)後の如月の初めつかたより、とりわきて密教の秘法を試みさせ給へば、夜も大殿籠らぬ日数へて、さすがいたう困し給ひにけり。心ならずまどろませ給へる暁がた、夢現とも分かぬ程に、後宇多院ありしからの御面影さやかに見え給ひて、聞え知らせ給ふ事多かりけり。うちおどろきて夢なりけり、と思す程、いはんかたなく名残かなし。

(第十七「月草の花」(三四二・三四三頁))

これが、帝に不撓の精神力をもたらし、隠岐脱出の機縁になる。顕現したのが亡父後宇多院ではあるが、夢が介在している点から、冥界からの働き掛けと見られよう。後醍醐帝は、復活への意欲を堅持しつづけ、隠岐の「異郷」的性格に依拠しながら、凶運を招く罪障を勤行によって浄化し、「再生」に成功したと考えられるが、それは神意にもかかって²²

のことであろう。後嵯峨院皇統の末裔の一端として衰滅を運命付けられた後醍醐帝が、凶運を克服して新皇統（王朝）の始祖となったという解釈も可能であろう。

五

結局、『増鏡』の皇位継承過程は、複数の皇統の盛衰で大枠を形成しているのである。後鳥羽朝樹立を原点とし、後高倉院・後嵯峨院・後醍醐帝を新秩序の開祖とし、⁽²³⁾ それぞれの皇統の興起と失墜を予言事象によって絶対化していると考えられる。その浮沈を広義の予言記事が脚色しているのである。なお、光厳帝は敗残の身になっても後伏見院の出家勸告に従わず現世的意欲を保持していた点（第十七「月草の花」(下)三六五・三六六頁）、子孫が「つひのまうけの君」と言われて皇位獲得が予言されている点（第十六「久米のさら山」(下)三三八頁）から後嵯峨院皇統や後伏見院系の衰滅から逃れ得るように思われる。始祖に準ずる存在なのかもしれない。

『増鏡』には四つの独立した皇統が流れている。ただし、後鳥羽院流と後高倉院流とは同じ時代に共存してもほとんど接触しない。他の皇統間でも同じことが言える。互いの明暗が対照されることは多く、怨恨が他を侵すことはあるが、皇統を異にする人物が同じ場に存在することとはほとんどない。つまり、有力皇族に限ってはあるが、各皇統を機軸とする複数の世界が『増鏡』一作品に併存していることになる。そして、各皇統世界の創始と終焉が狭義の予言事象によって不動のものとされ、その大枠の中で不安定な広義の予言が明暗の対照を強調しているも

のと思われる。（未完）

註

- (1) 『増鏡』本文の引用は、井上宗雄訳注『増鏡（上・中・下）』（講談社学術文庫、昭和五四・五八年刊）により、（ ）内に適宜説明事項を補足する。
- (2) 拙稿『増鏡』の世界——「皇位継承」の意義をめぐって——（『日本文芸論叢』第二号、昭和五八年三月）参照。
- (3) 井上宗雄氏の講談社学術文庫本（宮内庁書陵部蔵桂宮本）には「古きにかはりて」とあるが、同本を写真複製する『真寸鏡 桂宮本』（昭和五五年、勉誠社刊）などによって「古きにかはりて」に改めた。なお、井上氏も「古例と変りなく」と口語訳する（(下)三四頁）。
- (4) 拙稿『増鏡』における過去と現在——「先例」の機能について——（『島根大学教育学部紀要』第二四卷第二号、人文・社会科学編、平成二年（二月）参照）。
- (5) (4)に同じ。
- (6) (4)に同じ。
- (7) 拙稿『増鏡』の構想に関する一考察——同趣事象の反復と明暗反転——（『菊田茂男教授退官記念 日本文芸の潮流』桜楓社、平成五年刊行予定）。
- (8) 芳賀矢一「歴史物語」（『芳賀矢一遺著』昭和三年、富山房刊）一三九頁。

『増鏡』の予言記事をめぐって (福田)

- (9) 松村博司著『歴史物語』(昭和三十六年初版、昭和五四年改訂版、塙書房刊) 初版二七三頁、改訂版二八八頁。
- (10) 丸谷才一著『後鳥羽院』(日本詩人選10、昭和四八年、筑摩書房刊) 三〇〜三七頁、樋口芳麻呂著『後鳥羽院』(王朝の歌人10、昭和六〇年、集英社刊) 一一七〜一九頁など参照。
- (11) 木藤才藏他「解説」『神皇正統記・増鏡』日本古典文学大系87、昭和四〇年、岩波書店刊、井上宗雄「増鏡」と和歌」(山岸徳平・鈴木一雄編『大鏡・増鏡』鑑賞日本古典文学第一四巻、昭和五一年、角川書店刊) など参照。
- (12) 鈴木孝枝「増鏡の文芸性」(『東京女子大学日本文学』第三二号、昭和四一年一〇月)、伊藤敬「増鏡の思想」(『中世文学』第二九号、昭和五九年五月)、同「増鏡の思想(統)」(『藤女子大学国文学雑誌』第三三三号、昭和五九年六月)、同「増鏡の思想(完)」(同誌第三四号、昭和五九年一月)、同著『増鏡考説―流布本考―』(平成四年四月、新典社刊) など。
- (13) 稲垣智花「大鏡の方法——「世の人」をめぐって——」(『中古文学論攷』第九号、昭和六三年一二月) など参照。
- (14) 学習院大学附属図書館本など永正本四本は「世の中ゆすりさばぐ」とする。佐藤敏彦「校本増鏡(三)」(『日本大学文学学部(三島) 研究年報』第三〇集、昭和五七年二月) による。
- (15) (12) に同じ。
- (16) 拙稿「歴史物語の系譜と『増鏡』——継承性と自律性の観点から——」(『島大国文』第二〇号、平成三年一二月) 参照。
- (17) (7) に同じ。
- (18) (7) に同じ。
- (19) 加藤洋介「八例Vの物語としての源氏物語」(『季刊いちこ』第三号、平成四年四月)。
- (20) このほかにも、後嵯峨院皇統の凶運にかかわるものとして、地震・天変・再度の内裏炎上などが指摘でき、流布本特有記事にも火災・大風などが見いだせるが、省略する。
- (21) 拙稿「『増鏡』と隠岐」(『山陰地域研究』第八号、伝統文化、平成四年三月) 参照。
- (22) (21) に同じ。
- (23) これは、皇位の表象としての三種の神器への注目度の高さとはほ一致している。佐藤勢紀子「『増鏡』の皇位継承観——三種の神器をめぐって——」(源了圓他編『国家と宗教 日本思想史論集』平成四年三月、思文閣出版刊) 参照。